

人間関係形成能力を高める対立解消プログラムの 学級への導入とその展開

池島徳大

(奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター)

倉持祐二 (奈良教育大学教育学部附属小学校)

橋本宗和 (田原本町立田原本小学校)

吉村ふくよ (室生村立室生西小学校)

松岡敬興 (御所市立御所中学校)

The Development of Lesson Plans “The Activities of the Conflict Resolution” for getting the Formative Ability of Human Relations in Elementary School for Sixth

Tokuhiro IKEJIMA

(Center for Educational Research and Development, Nara University of Education)

Yuji KURAMOCHI (Elementary School attached to Nara University of Education)

Munekazu HASIMOTO (Tawaramoto Elementary School)

Fukuyo YOSHIMURA (Murou-nisi Elementary School)

Yoshiki MATSUOKA (Gose Junior High School)

要旨：対立解消 (Conflict Resolution) スキルの獲得を目的とした一連のクラスワイド・ピアサポートプログラム (全10セッション) を、小学校6年生児童に導入し、その展開のプロセスについて検討した。

キーワード：人間関係形成能力 the Formative Ability of Human Relations、クラスワイド・ピアサポート Classwide-Peer Support、対立解消 Conflict Resolution

1. 問題と目的

池島ら (2004) は、人間関係形成能力の育成を意図したピアサポートプログラムの開発を2003年度から開始し、欧米で行われているような特定の子どもに対して行うピアサポートトレーニングではなく、学級の子どもたち全員を対象に行うプログラムの開発を試行してきた。学級の子どもたちに導入していくと、児童の友人関係や学習意欲に有意な傾向がみられるなどの効果が得られてきている。(池島 2004)

ピアサポートは、「子どもたちが悩みを抱えたり、困ったりしたときに友だちに相談することが最も多いという事実 (Carr, R 1980)」に基づいて行われる活動である。困っている人を助けようとする子どもの自然な援助資源を生かし、支援する側、される側双方に「他者を思いやることを学ばせるための一方法 (Cole, T 1999)」として意義のある活動である。専門的な役割をもつスタッフ (教師) やプロフェッショナル

ルカウンセラーでは行き届きにくい子どもの微妙な領域に、身近にいる子どもたちが援助の手を差し伸べることができるように傾聴スキルなどの獲得を意図した活動を展開していくことは極めて有益である。

イギリスでは、いじめ解決の一方法としてピアサポートが大きな成果をあげ、いじめの解決は言うに及ばず、ピアサポーター側においても、自己有用感の形成に役立っている (Cowie & Sharp 1997)。

Cowie & Sharp (1997) によると、ピアサポートによる同輩支援システムは、「若者たちがもっている共感的にケアするという潜在能力をより促進するため、若者の内なる資質のうえに組みあげられる仕組みである」とピアサポート活動のコンセプトについて言及し、ピアサポート活動の内容として、次の3つをあげている。

Table 1 に示したように、ピアサポート活動を学校システムのなかに導入していくためには、同輩支援という観点から、①友だちづくり (Be-friending) ②相

Table 1 ピアサポート活動の内容
Cowie & Sharp (1997)

活動	活動内容
①友だちづくり (Be-friending)	友だちでいること、その相手がいることで学校などでの自分の居場所を実感できる状況を保障する。生徒がもつ支援のスキルを日常生活に適応する活動。
②相談活動 (Counseling approach)	訓練を受けたピアサポーターが、問題を抱えた生徒の相談にのる活動。
③対立解消 (Conflict Resolution)	問題を抱えた生徒同士の二者関係に、仲裁と傾聴の訓練を受けたピアサポーターが、多くの場合定められた手順に従って話を聴き、両者が納得できる解決の方法を探る支援をする活動。

談活動 (Counseling approach) ③対立解消 (Conflict Resolution) の3つのアクティビティーを、同輩支援メニューとして導入していくことが必要であるといえる。

池島 (1997) が、いじめなどのない学級づくりを進めていくには、学級の子どもたちのなかで生じる「ピアプレッシャー (仲間の圧力)」をできるだけ取り除き、親和的な学級を形成していくことが不可欠であることを指摘したように、予防的・開発的な観点からのアプローチが今日の学校教育で求められよう。

本研究で取り上げる「対立解消」は、どちらかと言えばこれまで、問題が発生したあとの事後指導としてとりあげられる様相が強かったといえる。その際、使用されるコーピング (対応) スキルは、たいていは「説教」や「説諭」が中心であったといっても過言ではない。

今般、ピアサポート活動の学校教育への導入にあたっては、西山 (2004) が述べるように「(ピアサポートは) 即時的で予防的な分野で支援する活動である」という視点をもって、対人関係を育む機会を学校教育に導入し、社会性の育成を全面的に押し出していくことが必要であろう。

例えば、けんかが起こったときに、けんかしている両者の言い分を十分に聴き合って、互いに損のない解決策 (WIN-WIN Solution) が見いだせるような援助方法を学習しておくことは、より豊かな人間関係を形成していくことにつながる。

子ども同士のちょっとしたもめ事やけんかは、学校生活では日常的に起こっている。しかし、これらの問題の解決には時間がとられることが多く、多忙な教師にとっては悩みの種となっている。

しかし、教師が最も苦慮しているのはその対応の方法であることが多い。子ども同士の対立問題に対し、

適切に対応できる「対立解消スキル」を教師自身をもっておらず、一方的な説教で終わってしまっていることも少なくない。当事者の言い分を十分に聴かずに、すぐに善悪の判断を下したり、あるいは相互の言い分も十分に聞かずにけんか両成敗的に指導してしまったりしているなどである。挙げ句の果てには、当事者間 (子ども同士) の問題が、いつの間にか仲裁に入った教員との間の問題にすり替わってしまうことも少なくなく、新たな問題を発生させてしまいかねない。そして、子ども・保護者との人間関係に禍根を残すといった状況も散見される。

対立解消スキルの導入にあたっては、傾聴スキルの訓練など一連のピアサポートプログラムのなかで行われることが必要である。Cole, T (1999) が指摘するように、「ピアサポート活動は、コミュニケーションスキルによるところが大きい」ためである。

また、Cowie & Sharp (1997) が示した、「友だちづくり (Be-friending)」の活動を取り入れていくことも必要である。それは、子どもたちは、学級のなかで強いピアプレッシャー (仲間の圧力) を抱いている。少しでもそれを取り除くために、日頃から心理的な緊張を和らげる、Be-friending活動を取り入れていくことは必要であろう。

そこで本研究では、以上の視点を踏まえ、対立解消スキルの獲得を目的とした、一連のクラスワイド・ピアサポートプログラムを小学校6年生の学級に導入し、その展開のプロセスについて検討を試みる。

2. 実践事例

2. 1. 対象

A県公立小学校6年生B学級児童(33名：男子17名、女子16名)

2. 2. 実施者

教職歴24年の男性担任教師

2. 3. プログラムの導入領域

国語の時間及び総合的な学習の時間、学級活動の時間を相互に関連させながら、一連のクラスワイド・ピアサポートプログラム (Table 2) を (全10セッション) 導入した。1セッションは45分である。

2. 4. 各プログラムのねらい

- ①相手の話に反応しながら傾聴できる。
- ②さわやかな自己表現ができる。
- ③仲間の相談に入ることができる
- ④対立解消の方法が分かる。
- ⑤獲得した対立解消スキルを使い、ピアサポート活動を実際に行う。

2. 5. プログラム導入の手続き

人間関係形成能力を高めるためのクラスワイド・ピアサポートプログラム（全10回のセッション）を開発し、担任教師が実施。実施期間は、2学期の修学旅行終了後以降である。今年度の折り返しの時期でもあり、学校の最高学年として、またリーダーとして下級生に模範を示していく時期でもあると考え、校内で起こっている「対立場面」取材し、実際に対立解消を図るピアサポート体験学習を行った。

#1～4は、国語科の指導内容である「話すこと・聞くこと」領域と関連が深いために、国語科の時間に行った。

#5～7は、総合的な学習の時間に、「戦争と平和」をテーマにしたミュージカルの練習と平行して行った。

#8は、学級活動の時間に行い、#9～10は自主学習として対立解消の事例収集を行い、主に帰りの会や朝の会などでその収集した事例をもとに、対立解消が図られているかをロールプレイングで考えさせた。

#1～8までの学習においては、主として、ウォーミングアップ、インストラクション、モデリング、リハーサル、フィードバックの順序で実施した。

ウォーミングアップでは、毎時、心を開きリラックスした状態にするために、ゲーム的な要素を取り入れ雰囲気を高めた。インストラクションでは、本時の学習目標を伝え、「詩」などを読むことでセッションのねらいに近付けた。モデリングでは、教師や代表児童によるロールプレイングを取り入れ、身につけたいスキルを全員がリハーサルできるようにした。フィードバックでは、気付きや感じを「心の扉を開いて」と題した200字詰め原稿用紙に記し、それを読み合い、本

時の学習の振り返りを行った。

2. 6. #1～6各セッションにおける児童の反応

(1) #1～#4におけるピアサポート学習

#1～#4においては、傾聴・応答・自己表現について学習した。一人ひとりが自分の聞き方や受け答えについて振り返ることができた。振り返り用紙に示された子どもの振り返りを示す。

<O子>

私は、今日勉強したことで、上手に断ることや、相手を励ますことのできる言葉、相手の気持ちを理解する大切さがよく分かりました。私は、今まで上手に断れなかったときもあつたけれど、今日勉強したようにちゃんと断らなければならないときは、相手にきちんと伝えたいと思います。それに、友達が悩んでいたら、まじめに相手の気持ちを考えて話せるようにがんばりたいです。今日習ったことは、大人になってもずっと役に立つことと思います。

<P男>

FELOR（注：Cole,T（1999）が傾聴モデルとして、示しているもの。Facing<顔を向ける>,Eye-contact<相手と視線を合わせる>,Lean<相手に身体を傾ける>,Open<開かれた姿勢で心を開く>,Relax<ゆったりと>の頭文字をとったもの。）などを学んで感じたことは、相手にいやな気持ちを与えないような対応をしようということです。攻撃的でも消極的でもなく、自分の気持ちを相手にしっかりと伝えたいと思いました。これからは、FELORなどを生かして対応し、みんなに自分の気持ちを正しく伝えられたらなあと思いました。これをみんながしていけば、戦争はおこらないと思いました。そして、けんかもなくなると思いました。

Table 2 ピアサポート・対立解消導入プログラム

#	月/日	目的	内容
1	11/5	傾聴	・すてきなあいさつを実行しよう ・気持ちを表す言葉を集めよう
2	11/10	傾聴	・指示カード話しやすい聴き方を探せ ・FELORモデルを身に付けよう
3	11/12	応答	・傾聴しながら反応しよう ・練習文でロールプレイをしよう
4	11/17	自己表現	・アサーティブな自己表現をしよう ・上手な断り方をマスターしよう
5	11/19	問題解決	・葛藤資料を読んで考えよう ・自分と他者の考えの違いに気付こう
6	11/24	問題解決	・下級生からの相談に応じよう ・問題解決に何が必要か考えよう
7	11/26	対立解消	・怒りのクールダウンをしよう ・AL'Sの公式を使おう
8	12/1	対立解消	・勝：勝の解決方法を見付けよう ・身近な対立場面を考えよう
9	12/3	対立解消	・対立解消事例カードを書こう ・ロールプレイで考えよう
10	12/8	対立解消	・対立解消事例カードを書こう ・ロールプレイで考えよう

「傾聴・応答・自己表現」の各スキルについて、現在のところ系統的なカリキュラムがまだ整備されていない状況にある。児童が語っているように、相手を励ますことのできる言葉の獲得や、攻撃的でも消極的でもなく自分の気持ちを相手にしっかりと伝えることのできるスキルの獲得は、人間関係形成能力を高める上で極めて大切なものである。知識で分かるレベルだけではなく、積極的に各スキルの獲得のためのトレーニングを、体験学習を通して行っていくことがピアプレッシャーを取り除いたり、お互いが思いやりを高め合ったりしていくことにつながっていくのである。

(2) #5～6におけるピアサポート学習

#6においては、小林・相川（1999）が作成した「下級生のA君からの手紙（Table 3）」を提示し、その相談に手紙という伝達手段で応じるという演習を導入した。下級生のA君からの手紙に返事を書くことに

よって、これまでに学習してきた「傾聴、応答、さわやかな自己表現（提案）」のスキルの獲得を確認した。

Table 3 下級生のAくんからの手紙

Bくんは、ぼくの家の近くに住んでいます。だから、学校からよくいっしょに帰ります。半年前に、Bくんは足の骨を折ってしまったために松葉づえを使うことになりました。

松葉づえでランドセルを背負うのは大変です。だから、ぼくはBくんのランドセルを持ってあげることにしました。そのときは、Bくんもとても喜んでくれました。

しかし、Bくんは足がなおっても、ぼくにランドセルを持ってくれと言います。ぼくが断ろうとすると、「なんで、おれのランドセル持ってくれへんねん」と、どなってくるのです。ぼくは、こわくてしかたなく、持ってあげることにしました。

いつも持たされるので、一度いやな顔をすると、なぐられそうになりました。それ以来、ぼくは毎日Bくんのランドセルを持っています。

ぼくは、いやでいやでたまりません。どうしたらいいでしょうか。

下級生のAくんからの手紙に対して、返事が書かれた。以下、代表的なものを示す。

<六年生のCさんの返事>

Aくんは、ランドセルを持ってと言われて、今とてもいやな気持ちになっているんだね（傾聴）。それで断るといやなことを言われたり、なぐられそうになったりしたんやね（傾聴）。こわいと思うけれど、勇気を持って一度「足も治ったんだから、ランドセルは自分で持ってよ。」と言ってみたらどうかなあ（提案）。きっと、Bくんも分かってきて、ランドセルを自分で持つようになるんじゃないかな。それでもうまくいかなかったら、また、私に相談してね。

<六年生のD男君の返事>

Bくんがけがをしたときにランドセルを持ってあげたのは、とてもよいことです（応答）。Bくんもとてもうれしかったはずですよ（応答）。でも、けがが治っているのに「ランドセルを持って」とBくんに言われて、今とてもいやな気持ちになっているんだね（傾聴）。Aくんがいやだと思っているんだから、Bくんのランドセルは持たなくてもいいと思います（応答）。勇気を出して言ってみたらどうですか（提案）。それでもだめなら、お母さんや学校先生に相談したらいいと思います（提案）。Bくんもきっと分かってくれると思うよ。

問題解決の相談にあたっては、まず、相手の気持ちを十分に受けとめて聴いてあげること（傾聴）。そしてその気持ちを汲んで返してやること（応答）が獲得

スキルとして必要である。そして、いま語られた事実を描写し、そのときの気持ち（くやしいとか悲しい気持ち）を返してやるのである。Cさんの応答で言えば、「Aくんは、ランドセルを持ってと言われて（事実）、今とてもいやな気持ちになっているんだね（感情）」となる。それで相手は相当冷静になる。そして、その上になって、解決ができるように少し新しい提案を試してみる（さわやかな自己表現・提案）のである。そのようなことができるように、手紙を書くという活動が導入された。相手の気持ちを受けとめ問題解決に当たっていくことを学ぶ活動である。

2. 7. # 7～10における対立解消（Conflict Resolution）プログラムの導入

7から「対立解消」を取り上げた。これまでのセッションでは、主に相手（一人）に対しての関わり方を学習し、傾聴、応答、自己主張のスキルの獲得をねらってきたものである。

今回取り上げた「対立解消」スキルは、Brown,D (2003) の“ALS Formula for Peer Mediation”がもとになっている。Mediationとは、「仲裁」のことである。対立している場面に、Peer Mediator（ピアメディエーター）が、和解決策を見出す手助けをし、対立が解消されるようにもっていく手法である。そのためのトレーニングを行うわけである。

実際のところ、現在日本ではこのような対立解消スキルは、教師研修にほとんど取り上げられていない。（前田ら2003）

本セッション（対立解消スキル）が導入されるまでに、担当教員をはじめプロジェクト研究構成員全員に、対立解消プログラムの事前トレーニングが、全5時間実施された。

以下、Table 4・5に、子ども及び担当教員に示された、Brown,D (2003) の「対立解消」の考え方について提示する。

(1) “Conflict Resolution” とは

Table 4 “CONFLICT” とは (Brown,D 2003)

“CONFLICT”

① CONFLICT IS NATURAL; IT IS NEITHER POSITIVE NOR NEGATIVE; IT JUST IS.

② CONFLICT IS NOT A CONTEST; WINNING AND LOSING ARE COMPETITIVE GAMES, NOT CONFLICT.

③ IN A CONFLICT BE HARD ON THE PROBLEM AND SOFT ON THE PERSON.

④ YOU CAN CHOOSE HOW YOU WOULD LIKE TO RESPOND TO ANY CONFLICT SITUATION.

⑤ ONE OF YOUR CHOICES IS TO SHIFT FROM “JUDGEMENT” TO “CURIOSITY”

Table 5 “Conflict Resolution” について
(Brown,D 2003)

CONFLICT RESOLUTION THROUGH MEDIATION	
①	ANOTHER ROLE OF A “PEER HELPER” CAN BE IN HELPING TWO PEOPLE RESOLVE A CONFLICT
②	THIS ROLE IS NOT ONE OF PROVIDING ADVICE OR TELLING THE TWO PEOPLE WHAT TO DO
③	INSTEAD, THE PEER HELPER ACTS AS A “COACH” TO HELP THE DISPUTANTS PROBLEM SOLVE TO REACH A WIN/WIN SOLUTION
④	THIS IS CALLED MEDIATION. THE PROSESS HAS THREE STAGES

対立が生じるのは自然なことである。対立は対立として存在し、対立を解消するときには、勝ち負けは存在しないのである。従って、相手を裁くという考え方で接するのではなく、対立している二人に対して、和解策を見出すのを手助けしようとする姿勢で関わるのが極めて重要である。その手助けとは、助言をしたり、どうすべきかを教えたりすることではなく、むしろ、けんかしている両者が互いに損のないような解決策-WIN-WIN SOLUTION-が見出せるように援助するのである。解決をするのはあくまでも当事者なのである。そのため、対立解消にあたっては、両者の言い分をしっかりと聞き止め、冷静に解決に向かうように援助していく姿勢が必要である。

ミディエーションのプロセスとして、Brown,D (2003) は、次の3つのステップ (“AL'S Formula for Mediation”) を提示している。

(2) “AL'S Formula for Peer Mediation”
(Brown,D 2003)

<AL'S法>

① Agree (合意)

<ul style="list-style-type: none"> ・問題を解決するために努力することに合意しますか。 ・話し合いのルールを守ることに合意しますか。(人の話に割り込まない。あざけったり、おかしい顔をしたりしない。真実を話す。解決ができなかったら、大人に協力を要請することを合意する。) <p><意見の不一致が生じたら、話をやめこのルールに立ち戻る></p>

② Listen (傾聴)

<ul style="list-style-type: none"> ・順番に互いの意見に耳を傾ける。 ・自分が話し始める前に、相手が言ったことを相手に伝える。 ・ルールを忘れない。 <p><意見の不一致が生じたら、話をやめこのルールに立ち戻る></p>
--

③ Solve (解決)

<ul style="list-style-type: none"> ・可能な解決策について話し合う。 ・そのうちの一つを選ぶ。 ・解決策に合意するか確認する。 <p><意見の不一致が生じたら、話をやめこのルールに立ち戻る></p>

以上の対立解消モデル “AL'S Formula for Peer Mediation” を、#7以下で子どもたちに示した。そして、これを学習プリントとして児童に配布し、3人グループで「対立している2人」、「仲裁に入る人」と場面を設定し役割を交換してロールプレイングで体験させ、スキルの獲得を図った。その後、グループ、学級全体でシェアリングを行い、対立解消の心地よさを味わった。

#9.10では、学校生活の中で起こる対立場面を求め、ピアサポート活動を実際に体験させた。その後、「対立解消事例カード」としてまとめ、記録させた。その一部を載せたのが、Table 6である。対立解消スキルの般化がねらいである。

Table 6では、登校中、1年生と5年生の2人が対立している場面に当該学級の6年生児童が遭遇し、C子が対応した事例である。想記法にもとづいて記録されたものである。AS'L法を使って、見事に解決しているのが分かる。

尚、ここでいうListen (傾聴) は、カウンセリングの基本技法 (國分1979) 「受容、繰り返し、明確化、支持、質問」の5技法をさす。

Table 6 C子の「対立解消事例カード」

	対立解消の場面	獲得したスキル
C子	: (A子の今にも泣き出しそうな顔を見て) どうしたの?	Listen
A子	: 「・・・」 (下を向いている)	
C子	: 今言える?	Agree

A子	：(しばらくしてから、うなずく) B 子ちゃんが、ランドセルをつかんで 押した。	を求める
C子	：(歩きながら)話を聴いてもいい? 解決のために私が入ってもいい?正 直に言える?(と、B子とC子に同 意を求める)	Agree を求める
A子	：いいよ	
B子	：うん	
C子	：ありがとう。A子ちゃんは、B子ち ゃんに何かしたの?	Listen
A子	：うん。B子ちゃんの首をたたいた。	
C子	：ああ、そう。B子ちゃんの首をたた いたの。	Listen
C子	：B子ちゃんに聞くけど、B子ちゃん は何かしたの?	
B子	：A子ちゃんのランドセルをつかんで 押した。	
C子	：ああ、そうか。A子ちゃんのランド セルをつかんで押したの。	Listen
B子	：うん。押した。	
C子	：それで?	
B子	：A子ちゃんにパンチされたから・ ・。	
C子	：B子ちゃんは、A子ちゃんに首をパ ンチされて腹がたったから、ランド セルをつかんで押したのかな?	Listen
B子	：うん。いつもふざける事が多いの で、「やめとき」といっているのに 聞かないから。	
C子	：A子ちゃんはどうかな?ふざけて聞 かないときがあったの	Listen
A子	：うん(と、ボツリ)	
C子	：そうか、ふざけて聞かないときがあ ったのだね。どうする・・・?	Listen
A子	：(15秒間ほど、黙ったまま)	
B子	：(15秒間ほど、黙ったまま)	
C子	：謝る?	Solve
A子	：(うなずきながら)うん、謝る	の提示
B子	：私も謝る	
C子	：じゃ、お互いに謝って解決しよう ね。	
A子	：ごめんなさい。	Solve
B子	：ごめんなさい。	
C子	：よかったね。	

2. 8. ピアサポート活動の導入前と導入後の「Q-U得点」の変化

ピアサポート活動の導入前と導入後の児童の変化を測定するために、「たのしい学校生活を送るためのアンケート(Q-U)」(河村, 1999)を実施した。プリテストの実施時期は2004年10月28日、ポストテストは、同年12月15日に実施した。

(1)「Q-U尺度」におけるプリテスト・ポストテストにおける得点比較

Table 7 「Q-U得点」の変化

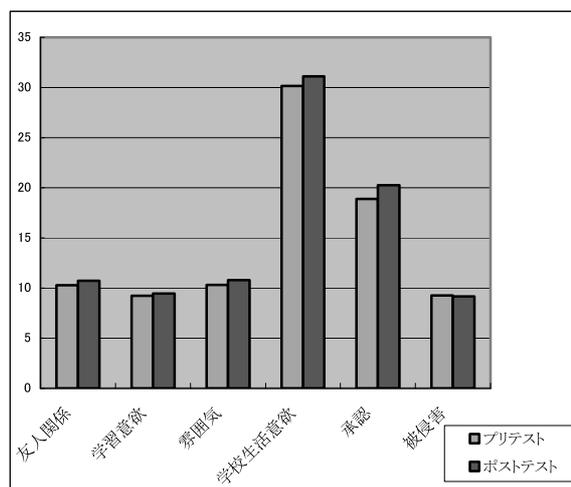


Table 8 「Q-U得点」の結果 (N=33)

	友人関係	学習意欲	雰囲気	学校生活意欲	承認	被侵害
プリテスト	10.29	9.23	10.32	30.16	18.87	9.26
SD	1.85	2.09	1.53	4.15	4.03	3.96
ポストテスト	10.74	9.45	10.81	31.10	20.26	9.16
SD	1.29	1.85	1.18	3.42	2.54	3.16
t検定						

Table 8に示すように、「友人関係」、「学習意欲」、「学級の雰囲気」の3項目及びそれらを統合させた「学校生活意欲」、「承認得点」及び「被侵害得点」においても有意差は認められなかった。しかし、それぞれの得点に増加傾向がみられた。(ただし、被侵害得点については、逆転項目のため得点の減少は増加を示す)若干ながら、有意傾向が見られたとよいであろう。

3. まとめ

本研究においては、本年度のプロジェクトの始動が9月からであったため、体制を整えて十分な実践研究ができず、プロジェクト研究構成員全員の実践研究を

示すことができなかった。

しかしながら、本研究で取り上げた「対立解消スキル」をプロジェクト構成員で実際に体験した結果、子どもの社会性の育成をはじめ人間関係形成能力を高める指導になりうるものが強く示唆された。

文部科学省（2001）が、最近の児童生徒の問題行動の背景や要因について、①社会性や対人関係能力が十分に身に付いていない状況 ②基本的な生活習慣や倫理観等が十分につけられていない家庭の状況 ③生徒指導体制が十分に機能していない学校の状況 ④大人の規範意識の低下や子どもを取り巻く環境の悪化が進む社会全体の状況を挙げ、「社会性を育むプログラムの開発や体験活動の充実を図るための支援」の必要性を学校教育に求めているが、本研究が、子どもたちの社会性を培う具体的なスキルとして提示できるのではないかと考える。

参考・引用文献

- Brown,D 2003 Creative Conflict Resolution:A Training Manual The Continuous Learning Curve CANADA
- Carr,R 1980 PEER COUNSELLING STARTER KIT:A Peer Training Program Manual PEER RESOURCES VICTORIA BRITISH COLUMBIA CANADA
- Cole,T 1999 KIDS HELPING KIDS, Peer resources, Canada (バーズ亀山静子・矢部文訳 ピア・サポート実践マニュアル 川島書店)
- Helen Cowie & Sonia Sharp 1997 PEER COUNSELLING IN SCHOOLS, David Fulton Publishers,London (高橋通子訳 1997 学校でのピア・カウンセリング 誠信書房)
- Helen Cowie 2003 Peer support:How young people themselves challenge school bullying SEMINAR PROGRAMME AND ABSTRACTS Oxford-Kobe Seminars St Catherine' s College (University of Oxford) Kobe Institute
- 池島徳大 1997 いじめ解決への教育的支援 日本教育新聞社
- 池島徳大・倉持祐二・橋本宗和・吉村ふくよ 2004 人間関係形成能力を高めるクラスワイド・ピアサポートプログラムの導入とその効果 奈良教育大学教育実践総合センター紀要 第13号
- 河村茂雄 1999 楽しい学校生活を送るためのアンケート「Q-U」実施・解釈ハンドブック (小学校編) 図書文化社
- 小林正幸・相川充 1999 ソーシャルスキル教育で子どもが変わる (小学校) 図書文化

- 國分康孝 1979 カウンセリングの技法 誠信書房 26-49
- 前田恵理、神山佳代子、小林亜紀、佐々木信三、下司昌一 2003 教員に対する教育相談研修の実態(1) -全国教育センターによる教育相談研修の傾向- 日本カウンセリング学会第36回大会ポスターセッション 九州保健衛生大学
- 文部科学省 2001 生徒指導白書 '03 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 学事出版 8-13
- 中野武房・日野宣千・森川澄男編 2002 学校でのピア・サポートのすべて ほんの森出版
- 西山久子 2004 諸外国のピア・サポートの歴史と動向-学校現場での仲間支援活動の起源から現在まで- ピア・サポート研究Vol.1
- 津村俊充 1996 体験集団によるトレーニング (相川充・津村俊充編 社会的スキルと対人関係 224-233 誠信書房)